

井ノ内稲荷塚古墳第9次調査
長岡京跡右京第1322次調査

現地説明会資料

1 発掘調査の目的と概要

- ・この調査は、国史跡乙訓古墳群の1基である井ノ内稲荷塚古墳の詳細な規模など、その実態を解明する目的で実施しています。また、当地は長岡京跡、井ノ内古墳群、井ノ内遺跡にも含まれています。
- ・調査地は、長岡京市井ノ内小西に所在し、発掘調査期間は、令和7（2025）年12月8日から令和8（2026）年3月上旬まで、面積は約160㎡を予定しています。
- ・調査は、令和7年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が実施したもので、現地調査は公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが担当しました。

2 井ノ内稲荷塚古墳とは

- ・井ノ内稲荷塚古墳は、古墳時代後期の前方後円墳です。平成5（1993）～平成9（1997）に実施された大阪大学の発掘調査によって、古墳の主体部である横穴式石室が発見され大きな話題となりました。乙訓という歴史的に重要な地域にあって、地域首長墓の主体部構造や副葬品を窺い知ることができる大変貴重な事例と言えます。以下に、井ノ内稲荷塚古墳の概要を示します。

規模 全長約46m、後円部の直径約29.4m、前方部長約16.6m、前方部幅約29.5m
くびれ部幅約21.5m、後円部の高さ約4m、前方部の高さ約3.5m

主体部 横穴式石室（後円部）、組合式木棺直葬（前方部）

横穴式石室：装身具（管玉、銀製耳環）、武器類（鉄刀・鉄剣・鉄鏃・金製刀装具）、武具（胡籥）、馬具（鞍・鐙・轡・雲珠・杏葉・辻金具・革金具・鉸具・金銅装板金具・鉾）、農工具（鉄斧・鉈・刀子・針状鉄製品）、須恵器、土師器

前方部木棺：武器類（短刀・鉄鏃）、装身具（耳環・玉）、須恵器

外表施設 段築未確認、葺石なし、埴輪なし

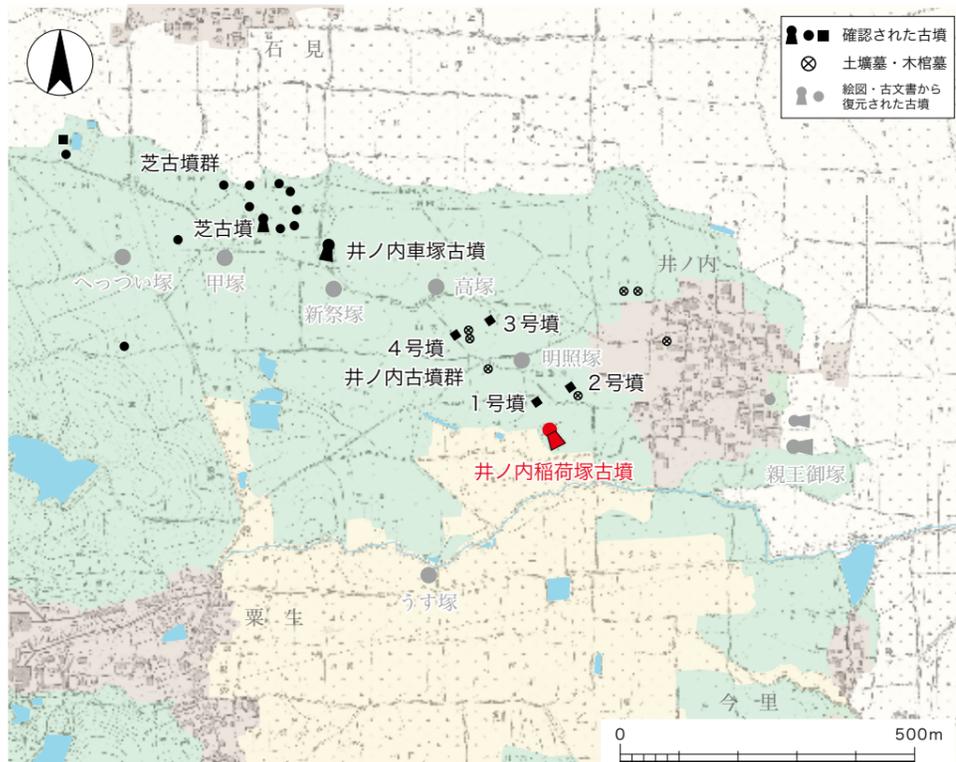


図1 井ノ内稲荷塚古墳と周辺の古墳 (1/12000)

時期	葛野	向日丘陵	長岡	大山崎
1期		五塚原 元稲荷		
2期	一本松塚	寺戸大塚 北山		
3期	百々池	妙見山	長法寺南原古墳	境野1
4期	天皇の杜	伝高島陵	今里車塚古墳	
5期	鮫山	牛廻り	カラネガ谷2 今里庄ノ洲 鳥居前 惠解山古墳	
6期			宇津久志古墳群	
7期		南条3		
8期	下山田桜谷 濠礼塚		井ノ内 塚本古墳 芝(芝1)	
9期	清水塚	物集女車塚	井ノ内車塚古墳	
10期	天鼓森		芝 井ノ内稲荷塚古墳	
終末期	稲原院寺	宝宮院院寺	今里大塚 乙訓寺	山崎院寺

図2 桂川右岸域の主要古墳編年表

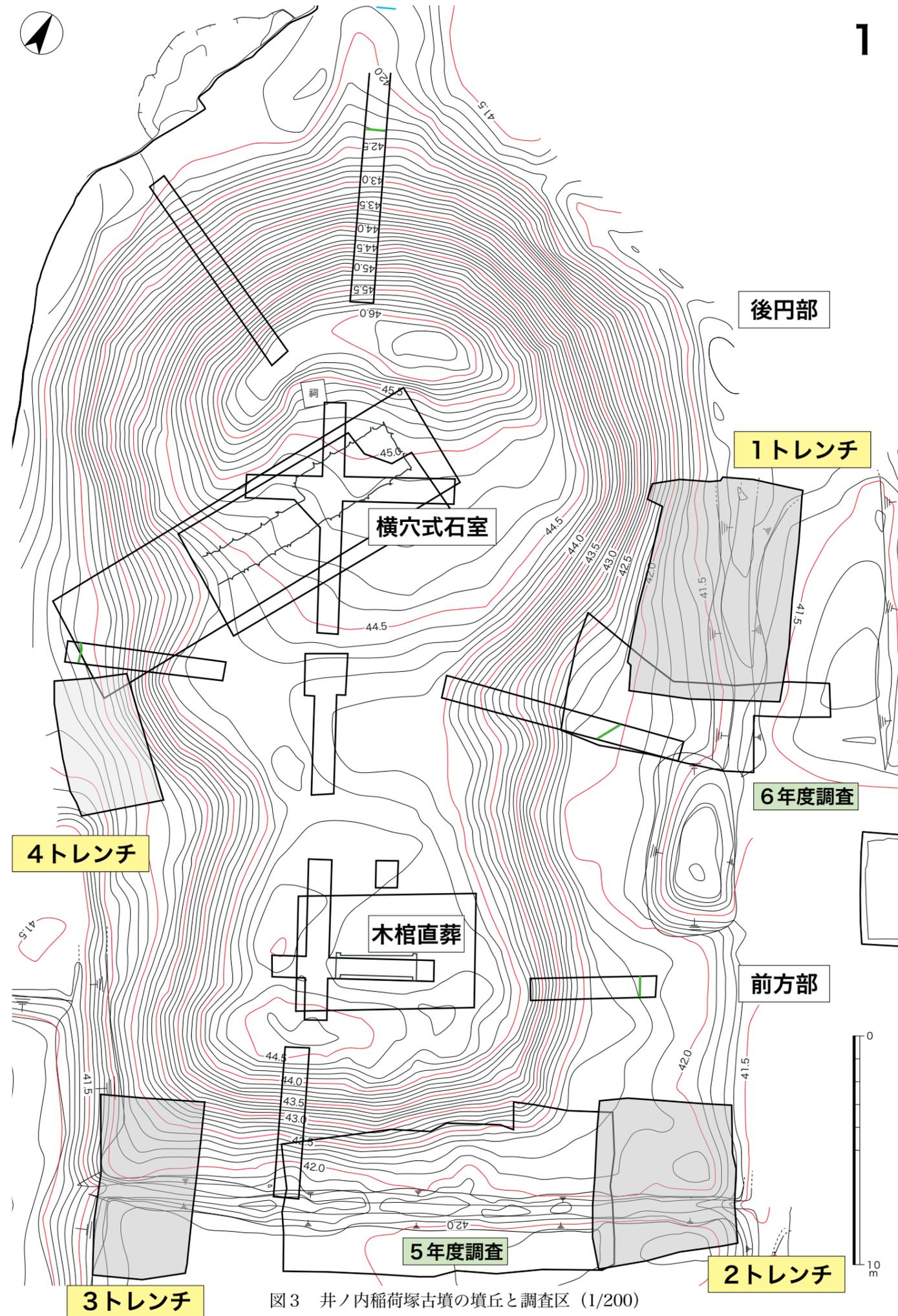


図3 井ノ内稲荷塚古墳の墳丘と調査区 (1/200)

3 発掘調査で分かったこと

1トレンチ (図3・4)

後円部の東側に設定したトレンチで、南辺が令和6年度調査区と重複しています。調査の結果、1トレンチでは6年度調査で確認した張り出し状部がさらに北側へ続くことと、周溝の状況を明らかにすることができました。また、新しい時期の遺構として、主に張り出し状部上面において近世以降の地境溝1条、中近世の土坑3基・小穴40基以上を検出しています。

張り出し状部と周溝 張り出し状部は、上面の規模が南北約9m、周溝側である南東への突出が3m程度を測りますが、竹を中心とした樹木の根によって形状が乱されており、上面には後世の小穴や土坑などが数多く穿たれていました。周溝底から張り出し状部上面までの高さは北側で1m、東側0.3m、南東側0.9mを測り、張り出し状部の南東隅(6年度調査区)と同様に北東隅は周溝が浅く掘削されており、陸橋が設けられています。張り出し状部周辺の周溝から出土した遺物には、古墳に伴う時期のものは含まれておらず、長岡京期や中世の遺物が数多く出土しています。

周溝の底がトレンチ北半で推定される後円部裾に向かって斜行していることから、周溝の方向は張り出し状部の北東隅に当たる陸橋付近から大きく変化しているものと考えられます。

後円部の墳丘盛土 トレンチ北西隅の地山上で、締まりの悪い黒茶褐色を呈する墳丘盛土を確認しました。トレンチ西辺にも及んでいるものと考えられますが、攪拌が激しく明確にできていません。

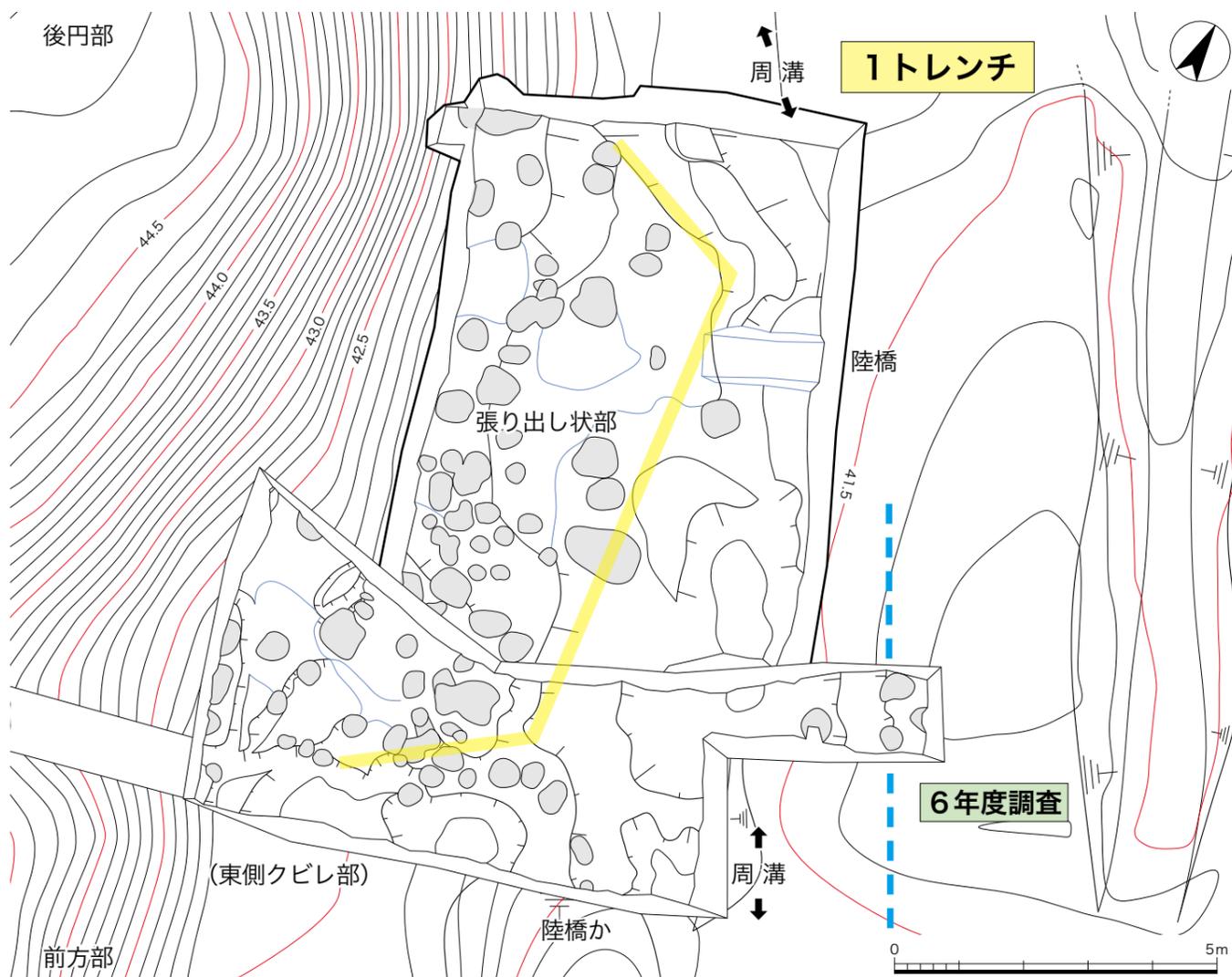


図4 本調査1トレンチ検出遺構図(1/100) ※灰色網掛けは後世の遺構

2トレンチ (図3・5)

前方部前面の東端に設定したトレンチで、東辺が令和5年度調査区と重複しています。調査の結果、2トレンチでは5年度調査区から東へ続く前方部前面の周溝が、推定される前方部前面東端の手前で途切れる状況を確認しました。前方部東側面の周溝は、後世の攪乱などの影響で確認されていませんが、前方部前面東端の手前で途切れるものと考えられます。また、2トレンチでは、新しい時期の遺構として近世以降の地境溝2条、近世の井戸1基と蛇行溝1条、中世の土坑1基、中近世の小穴16基を検出しています。

前方部前面の周溝 最大幅約3m、最大深約0.4mを測りますが、2トレンチのほぼ中央部で収束していました。このことから、前面の周溝は前方部東側面の周溝と接続せず、推定される前方部南東端の地山が掘り残され陸橋状となることが分かりました。

周溝の断面形状は、平坦な底部から前方部側へ急角度で立ち上がっていますが、南側の古墳外及び想定される前方部前面東端へは緩やかに傾斜しており溝の肩部が明確ではありません。周溝埋土の出土遺物は限られており、長岡京期や中世の遺物が目立ちます。

前方部の墳丘盛土 2トレンチ北西隅では、黄褐色弱粘質土の地山上に施された、締まりの悪い黒茶褐色を呈する墳丘盛土を確認しました。推定される前方部前面東端に至る斜面には、長軸約3mを超える楕円形井戸が穿たれており、前方部の墳丘斜面に関する情報が部分的に失われていました。

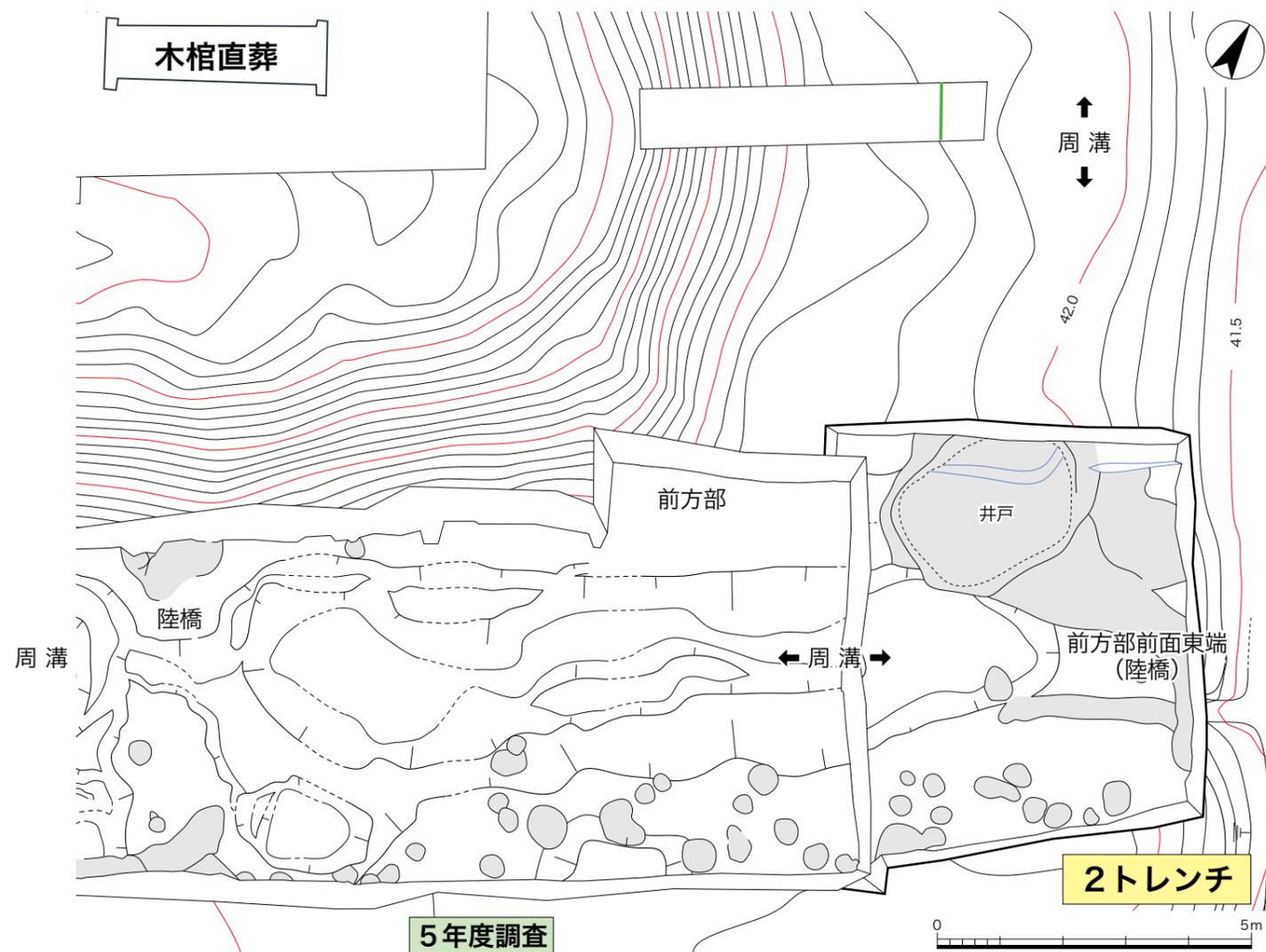


図5 本調査2トレンチ検出遺構図(1/100) ※灰色網掛けは後世の遺構

3トレンチ (図3・6)

前方部前面の西側、令和5年度調査区の西端から約4m西に設定したトレンチです。調査の結果、3トレンチにおいても前方部前面の周溝を確認することができました。しかし、推定される前方部前面西端と西側面は調査対象地外であり、地境の攪乱などにより前方部西側面に関する情報は得られていません。また、3トレンチでは、新しい時期の遺構として近世以降の地境溝1条、中近世の土坑3基や小穴16基を検出しています。

前方部前面の周溝 最大幅約3m、最大深約0.3mを測ります。周溝の断面形状は、平坦な底部から前方部側へ急角度で立ち上がっていますが、南側の古墳外へは緩やかに傾斜し溝肩部が不明瞭でした。周溝埋土の出土遺物は非常に少なく中世の遺物が目立ちます。

前方部前面の周溝は、本調査2・3トレンチと令和5年度調査で確認しています。その結果、周溝は古墳しゅじく主軸上と考えられる位置の地山が掘り残され陸橋状となること(5年度調査)、陸橋の両側が深く東側と西側の端へ向かって浅くなるよう掘削されていること(本調査2・3トレンチ)、そして、推定される前方部前面東端の手前で途切れること(本調査2トレンチ)が明らかになりました。

前方部の墳丘盛土 3トレンチ北側では、黄褐色系の弱粘質土及び砂礫土の地山上に施された、締まりの悪い黒茶褐色を呈する墳丘盛土を確認しました。

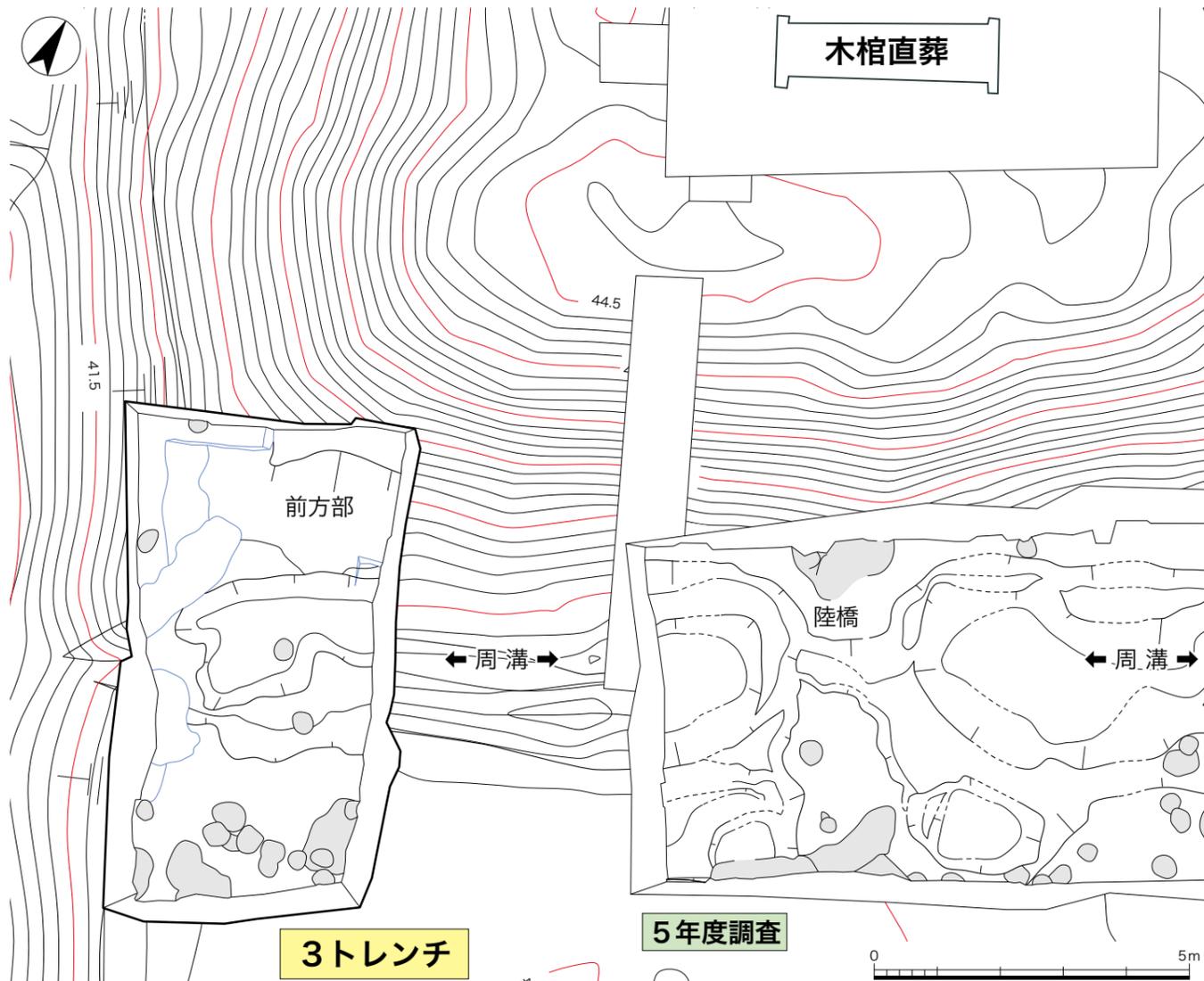


図6 本調査3トレンチ検出遺構図 (1/100) ※灰色網掛けは後世の遺構

(参考) 4トレンチ (図3・7)

4トレンチは、後円部の南西側、推定される西側くびれ部に関する情報を得るために設定しました。しかし、トレンチの南辺を断ち割り土層観察を行った結果、後世の土が非常に厚く堆積していることが判明し、排土置場の確保や巨大な樹木根のため面的調査は困難と判断しました。

ただ、トレンチ南辺断ち割り部では、現地表下1~2mで砂礫の地山面を確認し、さらに断ち割り部の東端では地山面が立ち上がることを確認しました。こうした地山面のあり方は後世の攪乱によるものかも知れませんが、これまで得られていなかった古墳西側裾部である可能性も残されています。

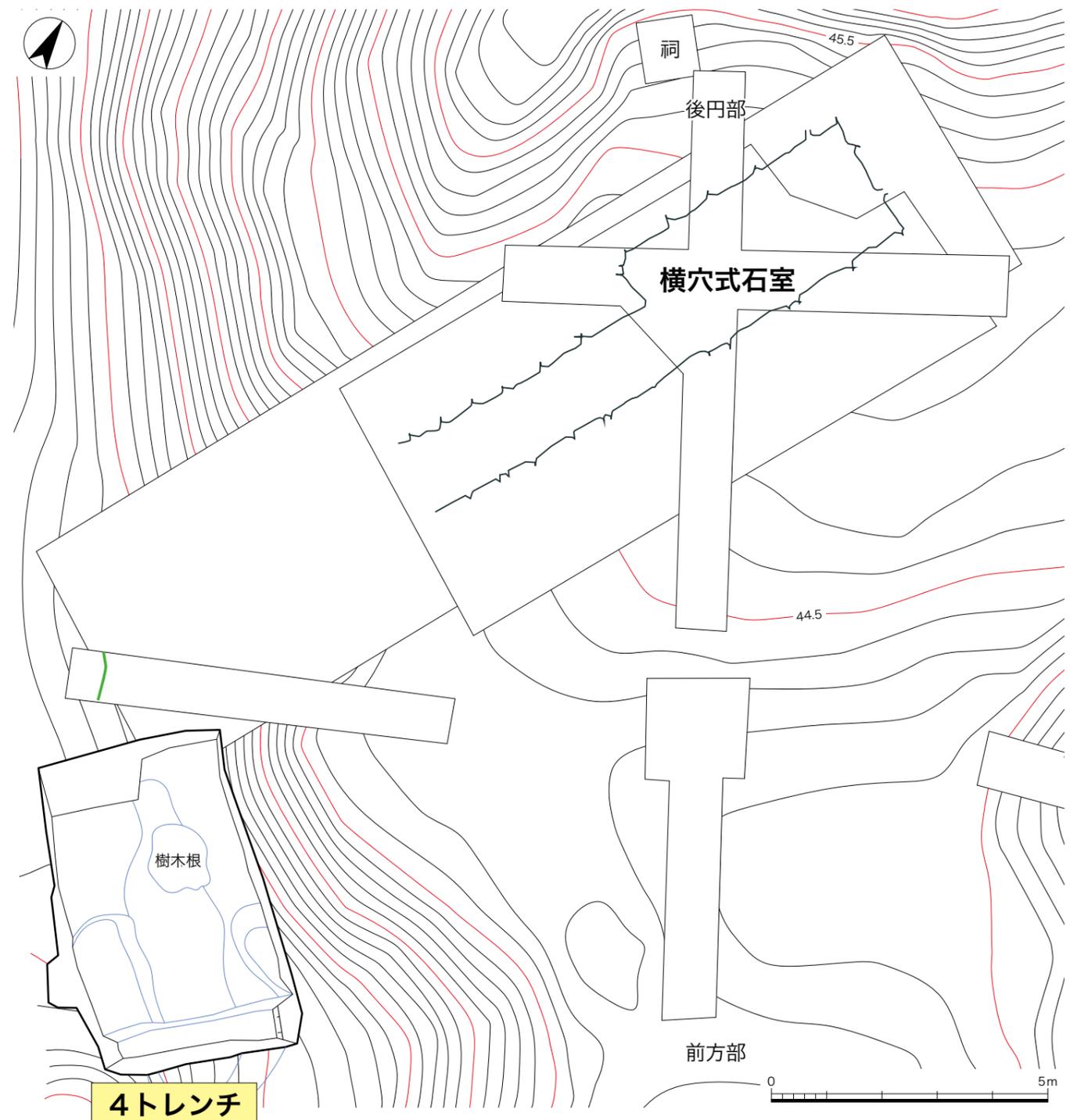


図7 本調査3トレンチ検出遺構図 (1/100)

4 まとめ

後円部に付属する張り出し状部の発見

本調査では、後円部南東側に設けた1トレンチにおいて、令和6年度調査で検出した張り出し状部の全容を確認することができました。後円部に付属する張り出し状部は、井ノ内車塚古墳の造り出しから引き継がれた施設と考えられ(図8左)、その規模は墳丘や横穴式石室と同様に井ノ内車塚古墳より一回り大きくなっています。張り出し状部のあり方は、井ノ内車塚古墳から井ノ内稲荷塚古墳へ、この地域の首長が安定した勢力を保っていたことを示すものと考えられます(図8右)。

井ノ内車塚古墳では造り出しに多種多様な形象埴輪が配置されていましたが、井ノ内稲荷塚古墳では埴輪は一切出土していません。また、張り出し状部周辺からは供献土器も出土していないため、張り出し状部は祭祀的あるいは外表施設としての意味を持たず、墳丘築造時などの通路的な役割へ変質していたのかも知れません。

前方部前面周溝と東端部の状況

2トレンチでは前方部前面東端の手前で前面の周溝が途切れる状況を明らかにしました。前方部東側の周溝に関する情報は得られませんでした。地山の検出状況から前方部前面と同様に東側の周溝も前面東端の手前で途切れるものと考えられます(図9)。こうした周溝のあり方や裾部の状況は、井ノ内稲荷塚古墳を復元する上で重要な成果であり、古墳時代後期における地域首長墓の構造を考える上での貴重な資料と言えます。

井ノ内稲荷塚古墳の周溝では、地山を掘り残した陸橋(陸橋状)が張り出し状部の南北隅、前方部前面東端・前方部中央の4箇所で見つっています。なかでも前方部前面の中央、古墳主軸上に設けられた陸橋(5年度調査)は南側に土坑を伴っており重要な意味を持っていたと考えられます。

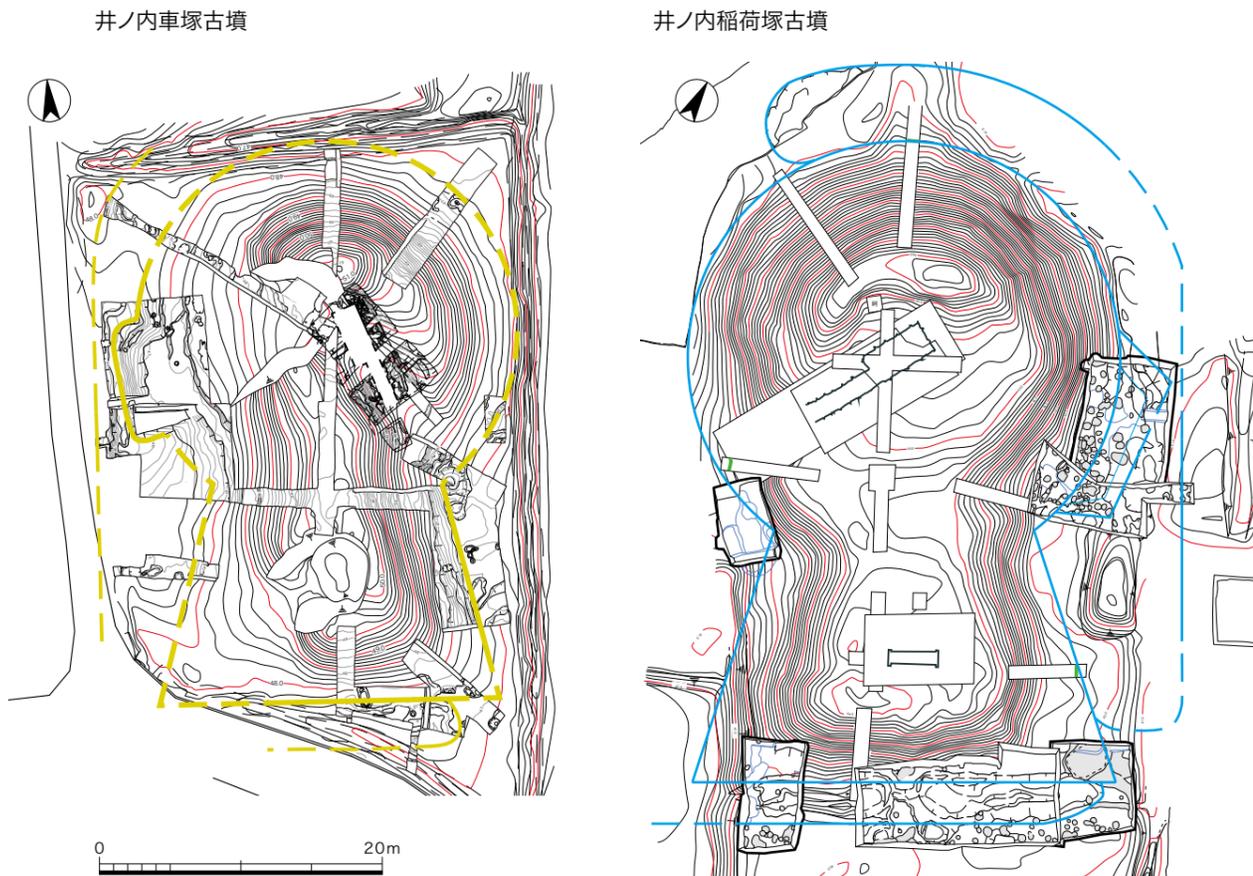


図8 井ノ内車塚古墳と井ノ内稲荷塚古墳の墳丘復元(1/500)

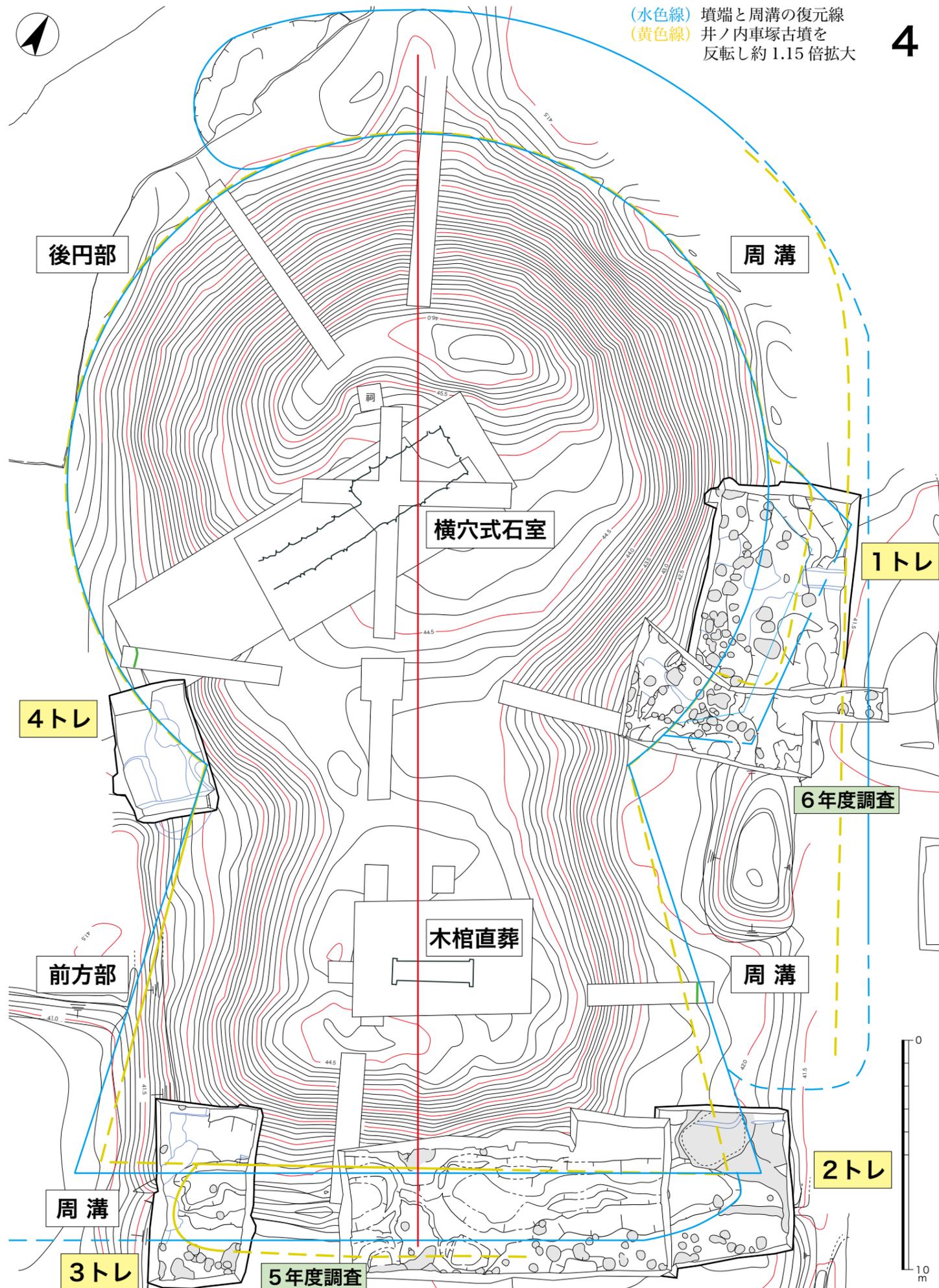


図9 井ノ内稲荷塚古墳の墳丘復元と調査区(1/200)